

国
(問題)
語
2011年度

〈2011 H23052023〉

注 意 事 項

- 1 問題冊子および記述解答用紙は、試験開始の指示があるまで開かないこと。
 - 2 問題は2～9ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
 - 3 解答はすべて解答用紙の所定欄にHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
 - 4 受験番号および氏名は、試験開始後、解答用紙の所定欄(2か所)に正確に記入すること。記述解答用紙の所定欄(2か所)には受験番号と氏名を、マーク解答用紙の所定欄には氏名のみを記入すること。
- 受験番号の数字は特に正確に記入すること。読みづらい数字は採点処理に支障をきたすことがあるので、注意すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- 5 マーク欄には、はつきり記入すること。また、訂正する場合は、消しゴムでていねいに、消し残しがないようによく消すこと(砂消しゴムは使用しないこと)。

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

- 6 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次のA・B二つの文章を読んで、あとの問いに答えよ。なお、BはAについて書いたものである。

A

一国民の心性上の活動を支配する者三あり、曰く過去の勢力、曰く創造的勢力、曰く交通の勢力。
今日の我國民が思想上に於ける地位を詳らかにせんとせば、少なくとも右の三勢力に訴へ、而して後明らかに、其關係を察せざる可からず。

「過去」は無言なれども、能く「現在」の上に号令の權を握れり。歴史は意味なきページの堆積にあらず、幾百世の國民は其の上に心血を印して去れり、骨は朽つべし、肉は爛るべし、然れども人間の心血が捺印したる跡は、之を抹すべからず。秋果熟すれば即ち落つ、落つるは偶然にして偶然にあらず、春日光暖かにして、百花妍を競ふ、之も亦偶然にあらず、自然は意味なきに似て大なる意味を有せり、一國民の消長窮通を言ふ時に於て、吾人は深く此理を感じずんばあらず。引力によりて相繫縛する物質の力、自由を以て独自卓犖たる精神の力、この二者が相率ひ、相争ひ、相呼び、相結びて、幾千幾百年の間、一の因より一の果に、一の果より他の因に、転々化し来りたる跡、豈に **a** に動かし去るべけんや。

然れども「過去」は常に死に行く者なり。而して「現在」は恒に生き来るものなり。「過去」は運命之を抱きて幽暗なる無明に投じ、「現在」は暫らく紅顔の少年となりて、希望の袂に絶る。一は死て、一は生く、この生々死々の際、一國民は時代の車に乗りて不尽不絶の長途を輪転す。

何れの時代にも、思想の競争あり。「過去」は現在と戦ひ、古代は近世と争ふ、老いたる者は古を慕ひ、少きものは今を喜ぶ。思想の世界は限りなき四本柱なり。梅ヶ谷も爰にて其運命を終りたり、境川も爰にて其運命を定めたり、凡そ爰に登り来るもの、必らず又た爰を去らざる可からず。この世界には永久の桂冠あると共に、永久の義罰あり。この世界には曾て沈靜あることなく、時として運動を示さざるなく、日として代謝を告げざるはなし。 **b** に之を見る時は、此の世界は一種の自動機關なり、自ら死し、自ら生き、而して別に自ら其の永久の運命を支配しつつあるものなり。

一國民に心性上の活動あるは、自由党あるが故にあらず、改進黨あるが故にあらず、彼等は劇場に演技する優人なれども、別に書冊の裡に隠れて、彼等の為に台帳を制する作者あるなり。偉大なる國民には必らず偉大なる思想あり。偉大なる思想は一投手、一拳足の間に發生すべきにあらず、寧ろ知らん、一國民の **c** 修養の力なるものを俟つにあらざれば、蕞爾たる大樹の如き思想は到底期すべからざるを。

過去の勢力は之を軽んずべからず、然れども徒らに過去の勢力に傾迷して、乾枯せる歴史の橋木に夢酔するは豈に國民として、有為の好徴とすべけんや。創造的勢力は、何れの時代にありても之を欠く可からず。國民の生氣は、その創造的勢力によつて下するを得べし。尤も多く **d** なるとき、尤も多く固形的なる時、國民は自然に墳墓を眺めて進みつつあるなり。創造的勢力は、潮水を動かして、前進せしむるもの、之なくては思想豈に円滑の流動あらんや、之なくては國民豈に、 **e** 生氣あらんや。

創造的勢力と馬を駢べて、相馳驅するものあり、之を交通の勢力とす。今や、思想に対する世界は日一日より狭くなり行かんとす、東より西に動く潮あり、西より東に流るる潮あり、潮水は天為なり、人功を以て之を支へんとするは、痴人の夢に類するものなり。東西南北は、思想の側のみ、思想の城郭にあらずなるなり、思想の最極は円環なり。切りに東洋の思想に執着するも愚なり、切りに西洋思想に心酔するも痴なり、奔流急湍に舟を行は難し、然れども舟師は能く富士川を下りて、船客の心を安うす、富士川を下るは難し、然れどもその尤も難きは、東西の二大潮が狂湧猛瀉して相衝突するの際にあり。此際に於て、能く過去の勢力を無みせず、創造的勢力と、交通の勢力とを鉄鞭の下に駆使するものあらば、吾人は之を國民が尤も感謝すべき國民的大思想家なりと言はんと欲す。

つらつら今の思想界を見廻せば、創造的勢力は未だ其の弦を張つて箭を交ふに至らず、却つて過去の勢力と、外来の勢力とが、勢を較して、陣前馬頻りに嘶くの声を聞く、戰士の意氣甚だ昂揚して、而して民衆は就く所を失へるが如き觀なきにあらず。

見よ、詩歌の思想界を嘲るものは、その余りに狹隘にして硬骨なきを笑ふにあらずや。見よ、政治を談ずるものは、空しく論議的の虚影を追隨して停まることを知らざるにあらずや。見よ、デモクラシーは宿昔の長夢を攪破せんとのみ悶き、アリストクラシーは急潮の進前を妨歇せんとのみ噪ぐにあらずや。斯の如き事たる素より今の思想界の必当の運命たるべしと雖、心あるもの陰に前途の濃雲を憂ふるは、又た是非もなき事共かな。今の思想界は実に斯の如し、徒らに人間の手を以て造化の力を奪はんとする勿れ、進むべき潮水は遠慮なく進むべし、退くべき潮水は顧眄なく退くべし、直ちに馳せ、直ちに奔り、早晩大に相撞着することあるを期すべし、知らずや斯かる撞着の真中より、新たに生氣悖々たる創造的勢力の醸生し来るべき理あるを。

(北村透谷「國民と思想」による)

注 梅ヶ谷……梅ヶ谷藤太郎。第十五代横綱。明治十八年引退。

境川……境川浪右衛門。第十四代横綱。明治十四年引退。

明治の知識人にとって、「国家」とか、「国民」は避けて通れない課題だった。北村透谷もその短い生涯の晩年に、いやおうもなしに「国民」のテーマに引き寄せられていった。「国民と思想」(明治二十六年七月十五日「評論」第8号)がそれである。なぜ、「国家」とか「国民」のテーマは不可避だったのか。そのことをよく語っているものに、この論文よりも五か月後に刊行された、徳富蘇峰の評伝『吉田松陰』(明治二十六年十二月)の次の箇所がある。五か月後と言っても、この評伝の原型となるものは、前年の「国民之友」(五月、九月)に連載されているので、そちらの方は透谷も読んでいたかもしれない。

国外の警報は、直ちに対外的思想を誘起し、対外的思想は、直ちに国民的精神を發揮し、国民的精神は、直ちに国民的統一を鼓吹す。国民的統一と、封建割拠とは、決して両立するのを容さず。それ外国てふ思想は、日本国てふ觀念を生ず。

日本国てふ觀念の生ずる日は、是れ各藩てふ觀念の滅ぶる日なり。各藩てふ觀念の滅ぶる日は、是れ封建社会顛覆の日なり。黒船の来航という「国外の警報」を起爆として起った明治維新が、「国民的精神」とその統一、そして、「日本国」という強力な觀念を生みだしてゆく政治過程が、大づかみに粗描されている。「国民的統一と、封建割拠とは、決して両立することできないのである。透谷も広い意味の文学というカテゴリのなかで、この課題の前に立たされていた。

透谷の「国民と思想」は、まず、最初に「(1)思想上の三勢力」という章を立てているが、その「三勢力」は、明治二十年代における、欧化と国粹の勢力の配置をにらんで考えられているだろう。しかし、彼の発想の卓拔さ、あるいは特異さは、その思想上の勢力を、欧化とか国粹とかいう現実存在する実体的な概念で、またそれらを単に並列的にとらえなかったところにある、と思われる。つまり、彼は「一国民の心性の活動を支配する者」を、時間概念である「過去の勢力」、主体的に位置づけられる「創造的勢力」、そして、空間的な概念である「交通の勢力」の、三つの勢力配置としてとらえたのである。

では「過去の勢力」とはどのような時間の威力なのか。これは単に伝統とか、国粹保存と呼べるものではない。長い歴史、あるいは時間の累積をかけて、精神と物質の力が相呼応し、対立し、戯れあって、原因が結果になり、結果が原因になるような過程を経て、一国民の心性を支配するような精神上の威力になるようなものとして考えられている。従って、それは単に肯定の対象でも否定の対象でもない、容易に動かじ去ることのできないものだ。言わば見えない制度や習慣、宗教や美意識と化したような、そんな時間の累積、思想の威力のようなものが想定されている。

しかも、透谷にとって思想は固定的なものではない。それは死んだり生きたり、競争し、戦い、運動し、代謝を繰り返す、「一種の自動機関」のような流動してやまないものだ。ここで思想の活動が、個性とか人格とかを捨象した、自立・自動の性格でとらえられていることは注目すべきだろう。こうして、「偉大なる国民」には、必ず、それを演出する「偉大なる思想」があつて、それは **a** になるようなものではない。しかし、いたずらに「過去の勢力」に拘泥していれば、思想は先に述べたような流動を失い、停滞におちいつてしまう。「国民の生氣」を盛んにするには、「過去の勢力」とは別の「創造的勢力」というものが想定されなければならない、と透谷は考える。しかし、そのように考えて苦しげなのは、それが未成の勢力だからだ。むしろ、「過去の勢力」と並んで競い合はじめたのは、「交通の勢力」というものだ。

この「交通の勢力」については、後に「外来の勢力」とも言いかえられているが、透谷はこれについても、単に否定や肯定の対象として扱っていない。透谷において、「交通」という概念が、思想のチームとして成り立つのは、そもそも思想というものの自然の在り方が、「流動」というところに見定められているからだろう。それは東から西に、潮水のように流れるのが自然の姿であり、誰もこれを人為的に押しとどめることはできないのだ。ただ、困難は、「東西の二大潮が狂湧猛瀉して相撞突する」時に生ずるだろう。透谷は書いている。

此際に於て、能く過去の勢力を無みせず、創造的勢力と、交通の勢力とを鉄鞭の下に駆使するものあらば、吾人は之を国民が尤も感謝すべき国民的大思想家なりと言はんと欲す。

この論理は、何を意味するのだろうか。東西の二大潮が激しくぶつかりあう場所、それは言うまでもなく明治二十年代の日本の思想状況だろう。その時に、どちらかの立場に立てば、東が西を西が東を否定することは容易である。しかし、透谷はそのいずれの立場にも立たず、それぞれの競合、戯れのなかに思想の生産力を見出そうとするからこそ、そこに「過去」へ「創造」へ「交通」の三概念を必要としたのだ、と見ることができる。透谷が問題としているのは、欧化や国粹の実体としての勢力ではなく、「国民の生氣」をふるいたたせる思想の勢力のことなのだ。

しかし、透谷の眼には、「国民の生氣」は、その創造的勢力によってトするを得べし」という、その三勢力の要となるべき「創造的勢力」が欠如している、と映っている。では、どうしたら「創造的勢力」は形成されるのか。今の思想界は狭いテリトリのなかの争いで、「徒らに人間の手を以て」、流動する思想の自然の力を奪っているからいけないのだ、どんな思想の勢力も、潮水の流れるにまかせてぶつかりあつたらとよい、と透谷は考える。

透谷が期待するものは、「過去」と「交通」の勢力が、欧化と国粹というような固定化した二つの立場で争い合うような衝突ではなく、思想の流動、混沌を生み出すような「撞着」であり、その中から醸成さるべき「創造的勢力」なのである。「国民と思想」の最後は、「復古、爾も亦た頼むべからず。消化、爾も亦た頼むべからず。誰か能く剛強なる東洋的趣味の上に、真珠の如き西洋的思想を調和し得るものぞ、出でよ詩人、出でよ真に国民大なる思想家。外来の勢力と、過去の勢力とは、今日に於て既に多きに過ぐるを見るなり。欠くところのものは創造的勢力」という文章で結ばれている。

(北川透「詩の近代を越えるもの——透谷・朔太郎・中也など」による)

問一 Aの文章中に傍線部1「人間の心血が捺印したる跡」とあるが、その具体例として掲げられた部分を、Bの文章中より十五字以上十八字以内で求め、そのはじめと終わりの三文字を抜き出して、記述解答用紙の所定の欄に記せ（句読点等が含まれる場合は、それらも一字とする）。

問二 A・Bの文章中の a に共通して入る語として最も適當なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。
イ 唯々諾々 口 一朝一夕 ハ 簡易輕便 ニ 曲学阿世 ホ 輕佻浮薄

問三 Aの文章中の b c d e に入る語として最も適當な組み合わせを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ b 自主的	c 精神的	d 封建的	e 健康的
ロ b 懷疑的	c 医学的	d 悲觀的	e 衝動的
ハ b 主観的	c 耐久的	d 保守的	e 進歩的
ニ b 俯瞰的	c 学問的	d 消極的	e 積極的
ホ b 大局的	c 献身的	d 反抗的	e 本格的

問四 Aの文章中の傍線部2「国民の生氣」は何によつて成り立たねばならないのか。最も適當なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 一貫した教化や教育を通して、身についていく基本的モラルや徳義。
ロ 国家を円滑にまとめていくべく、自ずから調和と統一を求める本能。
ハ 無意識のうちに、東洋思想と西洋哲学とを融合させていく平衡感覚。
ニ 誰もが有する、既存の概念から新しいものを生み出そうとする意欲。
ホ 閉塞した現状を打破するため、異質なものを積極的に取り込む姿勢。

問五 Aの文章中の傍線部3「創造的勢力は未だ其の弦を張つて箭を交ふに至らず」とあるが、この状態をBの文章中ではどのように説明しているか。該当する部分を五字で抜き出し、記述解答用紙の所定の欄に記せ（句読点等が含まれる場合は、それらも一字とする）。

問六 Bの文章中の傍線部4「思想の活動が、個性とか人格とかを捨象した、自立・自動の性格でとらえられている」とはどのようなことか。最も適當なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 特定個人に限られる行為ではなく、その時代を生きる人々の心に自然發生的に思想が沸き上がってくるということ。
ロ 少数派の意見を徹底的に排除していくことによって、大多数が共感、共有できうる思想を構築していくということ。
ハ 個々人がどうあるかではなく、国家全体としてどうあるべきかを考えていくことを優先した思想を持つということ。
ニ 各人がそれぞれ主體的に考えるのではなく、国家によって提供された思想に賛同する姿勢をとっていくということ。
ホ 実際は他者からの受け売りであるにもかかわらず、自ら生み出した思想であるかのようにアピールすること。

問七 A・Bの文章から読み取られる透谷の主張を説明した文として最も適當なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 透谷は将来の国民思想は、過去の勢力と交通の勢力の双方を否定して屹立する創造力によつてしか確立し得ないことを痛感し、そのような創造力を發揮する国民的英雄の出現を期待している。
ロ 透谷は外国勢力と対峙することのなかった過去においては、国民もその思想も成立し得なかったと見て、東西交通の激しい新時代的情勢の中に国民思想が誕生する機運と希望を見出している。
ハ 透谷は過去の封建的な勢力が思想を自然的な因果関係としか捉えていないことに限界を見出し、新たな国民が海外の思想を学んで自然的な勢力から創造力を解放しなくてはならないと説く。
ニ 透谷は一定の価値観から国民思想の是非を論断するという方法をとらず、むしろそれを自然的な勢力の中でおのずから形成されるものととらえ、当時の混沌とした思想状況を肯定している。
ホ 透谷は過去の勢力と交通の勢力が流動的な状況や混沌とした矛盾の中でやがて崩壊してゆくことを予言し、創造的勢力だけが困難な時代を生き抜く上での唯一の希望であると主張している。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

「読むこと」って何だろうな、と思ひめぐらしていくうちに、これはとても静かで気楽な所業、ただ「読め」と、言いおそれられるような甘い課題ではないことに気づきはじめた。

たとえば、貧苦にあえぐ他者の心を、文字を介してほんとうに「読み解く」ことはできるのか。一篇の詩を静かに読み上げること、他者に対して（あるいは共同体の歴史をふりかえって）、どのような「責任」が生じるのか。あるいは伝承すること、注釈すること、読みふけてなにも行動に出ないでいることだけで、未必の故意もあれば、社会を突き動かす力を読書は秘めているのかもしれない。読むことが、それじたい歴史のリアリティーのひとつであると同時に、ある日のある場所、群衆を広場へと急ぎたて、国家に住む人々の現実をがらりと旋回させるパワーもあるであろう。そういう「読み方」には、功罪はあるのだろうか、ないのだろうか。それらをふくめてまず

イ

I

をきつかけとして、自ら考え抜くことの

他者の心といえば、むかし日本には「心相」ということばがあった。あえて現代語になおすと「心模様」、指紋のように誰もが持つ固有のデザインだと考えられていた。会ったことがない人でも、その人の心模様をたどって面相（外見）をあるていど想像もし、一つの時空間にいるかのような気持ちで心を通わせることができる、と見られていた。「人心同じからざる、こと面のごとし」という中国の言い回しからしても、アジア全地域には、人間の持つ外見と内面の間に、何か糸のようなむすびつきがあると信じられていたことがわかる。

ロ

しかし姿だけで思いを伝え、心を理解し合おうといっても、たとえばその姿を臉に焼き付けたままにリアルに伝える伝達方法がない前近代の時点では、限界は当然あったであろう。日本でその時代が終わったのは幕末であり、開かれた港から上陸した映写技術や肖像油絵などの急速な普及によって、読書をふくめた表現の状況はかなり大きく転回した。写真の歴史は、まさしく人びとに「心」の交流を約束することから火蓋を切って落とされたのである。「譬は幼少にして親にはなれ、其面を知らざるものも鏡影（写真）あれば、まさしく生るに事ごとく、或は遠きヨウ離散の兄弟朋友なりとも、とりかはし置ときは常に相対することにならず」というように撮っては送り合い、離別の情をなぐさめる手段として写真は宣伝されていた（慶応元年頃、鶴岡玉川「写真鏡大意」）。油絵も、描かれた人物の力と器量を世間に誇示するためというよりも、写真と同じく、個々の心の表現として売られていた。子にあつては「亡父兄の肉身に等しき油絵の肖像に対して、在世間の恩恵を追報するの感念を起し、厚く愛慕敬礼するの具と為べし」と日本のパイオニアたちは見ていた（高橋由一「肖像油絵の説明」）。固定したイメージを通して他者の心をわが心に受け入れ、とどめておく。「心相」の共有は、たとえば文学について語るとすれば、どうなるのだろうか。実は文学のことばも、二〇世紀を通して、心に働きかける一種の感光メカニズムとして理解されたものだった。

二

譬えて言ってみれば、書籍と申すものは、不可思議な現象液のようなものであつて、読者各自の精神の種板に予め写し置かれた影像を現像してくれるものなのだろう……。

昭和十五年、フランス文学の権威、渡辺一夫博士が記した文章である（『書籍について』）。しよせん読者の心にすでに焼き付けられたイメージしか文学はあぶり出せないから、その心の善悪しだい、本は毒にも薬にもなるのだ、と博士は言いたげだ。この言は戦時中、ものを書く人間が心に利く「現象液」をよくよく薄めてから書かないと危険だよ、という主張と受けとれよう。読むことが、その時代その地域によってカク然と異なり、ニュートラルなものではないことを示している。

ホ

さて平和に生まれ、まぶしいほどの選択肢からライフスタイルを自由に選べるわたくしたちが、どのようにして他者の「心相」をとらえようとしているのか。

あらゆる空間にイメージがあふれ、しかもほとんどが固定的ではなく、一瞬のうちに自在に動かせ、作りかえさせられ、そして終わらせることにこそ真価を認められている。

ニ

とすばしい切り替えが嗜好され、それがくりかえされる風景の上に、眼がおどる。しかしそうやってこしらえたイメージだけでは、眼は人間の心が達しうる深度にまではたして届くのだろうか。言葉として紙の上に刻印され、表紙にくるまれた書物こそ、ある意味では究極の「他者」といえるのかもしれない。見えな

ハ

い人の姿をくつきりと見せつける、意地悪でパワフルな他者であるけれど、それだけ渡り合っていく甲斐もあるだろう。

問八 次の文は、本文中に入るべきものである。

イ

ハ

から最も適当な箇所を選び、その記号の記入欄にマークせよ。

逆にいえば、姿かたちから他者の心を思い知る、という発想も生まれ、どのジャンルでもイメージというものを重視する文化に育っていったのかもしれない。

問九 空欄 I に入る最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 「読むこと」を通じて浮かび上がる共同体の歴史
ロ 「読むこと」によって喚起されてくる現在と未来
ハ 「読むこと」が開示する想像力と来たるべき未来
ニ 「読むこと」としてくぐられる営為の歴史と現在

問十 傍線部 A 「心」の交流」が幕末にどのようなものであったかを写真と関連づけて説明している最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 写真に映っている兄弟や友人の顔を見ていると、常に一緒に過ごした、懐かしい過去の日々の出来事が想起される。
ロ 写真を添えた手紙をお互いに送りあっていると、見知らぬ人々とのあいだで、いつでも心が通じるような気になる。
ハ 写真を取りかえつつ毎日見続けていると、ふだん交流がなく疎遠になっていた友人とも兄弟のように親しくなれる。
ニ 写真を交換して手元に持っていたら、遠くにいる兄弟・友人たちといつも互いに向かいあっているのと変わらない。

問十一 傍線部 B 「感光メカニズム」がたとえていることを説明している最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 文学のことが人々の「心模様」を写し出し、近代の歴史に記録する機能。
ロ 文学のことが人と人の心の架け橋となり、相互の理解を深めていく構造。
ハ 文学のことが人に働きかけ、明確な像を心の中に浮かび上がらせる仕組み。
ニ 文学のことが他者との対話を通じて、次第に心象に固定化していく過程。

問十二 空欄 II に入る最も適当な語句を次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 普遍性 ロ 流動性 ハ 主体性 ニ 歴史性

問十三 本文の内容と合致するものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 読む行為は、映写技術や肖像油絵などが広く普及するようになった近代社会において、以前にもまして大きく発展を遂げた。
ロ 読む行為は、「他者」を真に理解するのと同様に、常に苦痛をともなう困難なものであり、努力が実らないことが多い。
ハ 読む行為は、各人の心の中で営まれていることであると同時に、時には革命を起こすほどに社会に影響を及ぼすこともある。
ニ 読む行為は、早く巧みに「他者」の考えを理解するのをもっとも重視するため、近代日本の社会の中で急速な進歩を遂げた。

問十四 傍線部 1・2 にあたる漢字を含むものを、それぞれ次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|---|------|
| 1 | イ | キヨウ地 | ロ | キヨウ弁 | ハ | 安キヨウ | ニ | キヨウ味 |
| 2 | イ | カク悟 | ロ | カク式 | ハ | 中カク | ニ | カク数 |

(三) 次の甲・乙・丙三つの文章を読んで、あとの問いに答えよ。

甲

漢文脈を何らかの思想として定位しようと試みるのは、骨の折れる作業に違いない。儒学あるいは儒教という括りであれば、学であり教であることの吟味は必要にせよ、思想として扱うのにそれほどの困難はない。儒家思想と言ひ換えればなおさらだ。漢籍の学としての漢学も、四書五経に代表される儒学を基点にしているから、輪郭はそれなりにつかめる。経史子集という四部分類の秩序自体が儒家のものだから、儒家思想を中心として構成された学として捉えうる。

しかし、漢文脈となると、話は一気に茫漠としてしまう。漢詩文を読み書きすることで醸成される思考と文体の型。そう定義してはみるものの、どのような思考でどのような文体なのかは、個別に即して語るよりほかはない。それを思想として定位できるのかどうかは覚束ないし、思想として定位してしまうと、もはや漢文脈とは呼べなくなってしまうかもしれない。むしろ、そこにこそ、漢文脈という概念の有効性はあるのだろう。たとえば頼山陽の著書や詩文は近世から近代にわたって漢文脈の源泉となりつづけたが、それを尊皇思想だと名指してしまえば、圏域の広さはむしろ見えなくなる。

漢文脈を和文脈と対比して、国学／漢学の二項や、和語／漢語の二項に置き換えて語ることも可能だろう。というより、もともと漢文脈という言い方はそこから起こされたものだ。しかし起点がそこからといって、いつまでも義理立てする必要がある。それは容易に、日本的なるもの／中国的なるものという二項対立を呼び起こしてしまうし、和文脈と漢文脈の二重性という類の話に落ち着いてしまいかねないからだ。こうした二項対立図式が危ういのは、その二項が暫定かつ可動のものであることを忘れ、あたかもその二項が不変であるかのような固着を招いてしまうところにある。文化集団としてのアイデンティティを求めることは、ナショナルなものでなくとも古来からある欲望だから、二項のどちらかにアイデンティファイしようとして、その二項対立を不変不動のものであるかのように扱ってしまう異はどこにでもある。その二項がつねに拮抗する対称関係にあると幻想するための契機はいつでもある。それを利用して「日出ずる処の天子」と称してみせることに戦略的意味はむしろあるけれども、称してみせているという自覚はあつたほうがいい。

むしろ、角度を変えてこう考えてはどうだろうか。漢文脈の核心は、そこに語られる思想の内容がどうであるかということよりも、読み書きする主体を、あるいはそれによって思惟する主体を形成することにある、と。この読み書きは、たんなる手習いではない。『文章軌範』を読み、『唐詩選』を吟じ、それを模倣してあれこれ議論を繰り広げたり、平仄を整えて詩を詠んだりするなど、一定の知的訓練を経て形成される読み書きの主体こそが、漢文脈の核にはある。

湯川秀樹『本の中の世界』(岩波新書、一九六三)「文章軌範」に、博士の随筆の自覚せざる手本が漢籍にあったことが述べられている。「昔からわが国では、理屈つばいこと、抽象的な内容を表現するのには、漢語が使われ、文章自身も漢文的になる傾向があつた」、自身の随筆もそれと同様だと言うのである。宣長が嘆いたことの裏返しではあるけれども、理屈なら漢文という通念はそれとして続いていた。

随筆の手本の代表として博士が挙げた『文章軌範』は、小学校上級のころに素読を受けたものである。「書きにくいことを書き、しかもそれがある長さのなかに、きちんとまとめあげる技術というようなものを、『文章軌範』を通じて——特に韓愈の文章を通じて、私は知らず知らずの間にある程度まで学びとっていたのではないかと思う」とあるように、ことに韓愈の文章に、手本としての文章の型を見出している。

博士が韓愈の文章のうちでまず挙げたのは『文章軌範』冒頭の「⁴于襄陽に与うる書」、要は就職幹旋を請うもので、これが「書きにくいことを書き」という評を導いているのだが、「韓愈はこんな文章ばかり書いていたわけではない」としてもう一つ挙げているのが、『文章軌範』では正編掉尾「³婦去来辞」の直前に置かれた「⁴李愿の盤谷に帰るを送る序」であるのは、そのことを如実に示している。

この「序」は、韓愈の友人李愿が立身出世を捨てて都を離れるのを送る歌とその序である。李愿の隠逸を社としてその言を伝え、自らの願望を添えて詠う。「窮居して野処し、高きに登りて遠きを望み、茂樹に坐して以て日を終え、清泉に濯ぎて以て自ら潔くし、山に採りて、美茹うべく、水に釣りして、鮮食うべし。起居時無く、惟適するところ之に安んず」とは李愿の言だが、韓愈の願いでもある。一方で立身出世を望み、一方でそこから離れた世界を思う。博士は「于襄陽に与うる書」には文章の巧みさを、「李愿の盤谷に帰るを送る序」には文章の美しさを見出した。たしかに文章のお手本としても同様あつてこそだが、のみならず、どちらも士人の X にかかわる文であることには意を払うべきだろう。思うようにならない世にあって、自身をどのような主体として位置づけるかに腐心する点で変わりはない。

(齊藤希史「漢文スタイル」による)

乙

漢意とは、漢国のふりを好み、かの国をたふとぶのみをいふにあらず。大かた世の人の、万の事の善惡是非を論ひ、物の理をさだめいふたぐひ、すべてみな漢籍の趣なるをいふ也。さるはからぶみをよみたる人のみ、然るにはあらず、書といふ物一つも見たることなき者までも、同じこと也。そもからぶみをよまぬ人は、さる心にはあるまじきわざなれども、何わざも漢国をよしとして、かれをまねぶ世のならひ、千年にもあまりぬれば、おのづからその意世中にゆきわたって、人の心の底にそみつきて、つねの地となれる故に、我はからごころもたらずと思ひ、これはから意にあらず、当然理也と思ふことも、なほ漢意をはなれがたきならひぞかし。そもそ人の心は、皇国も外つ国も、ことなることなく、善惡是非に二つなければ、別に漢意といふこと、あるべくもあらずと思ふは、一わたりさることのやうなれど、然思ふもやがてからごころなれば、とにかくに

此意は、のぞりがたき物になむ有ける。人の心の、いづれの国もことなることなきは、本のまごころこそあれ、からぶみにいへるおもむきは、皆かの国人の **I** さかしら心もて、いつはりかざりたる事のみ多ければ、真心にあらず。かれが是とする事、実の是にはあらず、非とすること、まことの非にあらざるたぐひもおほかれは、善惡是非に二つなしともいふべからず。又当然之理とおもひとりたるすぢも、漢意の当然之理にこそあれ、実の当然之理にはあらざること多し。大かたこれらの事、古き書の趣をよくえて、漢意といふ物をさとめれば、おのづからいとよく分るるを、おしなべて世の人の心の地、みなから意なるがゆゑに、それをはなれて、さとることの、いとかたきぞかし。

(本居宣長の文章による)

丙「返り点・送り仮名を省いた箇所がある。」

士之能享大名、顯當世者、莫不有先達之士、負天下之望者、為之前焉。士之能垂休光、照後世者、亦莫不有後進之士、負天下之望者、為之後焉。莫為之前、雖美而不彰。莫為之後、雖盛而不傳。是二人者、未始不相須也。然而千百載乃一相遇焉。豈上之人無可援、下之人無可推歟。何其相須之殷、而相遇之疎也。其故在下之人負其 **II**、不肯諂其上、上之人負其位、不肯顧其下。故高材多戚戚之窮、盛位無赫赫之光。是二人者之所為皆過也。未嘗干之、不可謂上無其人。未嘗求之、不可謂下無其人。愈之誦此言久矣。未嘗敢以聞於人。

注 休光……立派な手柄。

戚戚……思いわずらうさま。気持ちが落ち着かないさま。

赫赫……輝かしいようす。

(韓愈「与于襄陽書」による)

問十五 甲の文章中の傍線部1「漢文脈という概念の有効性」の説明として最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 一定の知的訓練を経た人々の漢詩文に関する思考のレヴェルや推移をはかる、新たな基準であること。
- ロ 特定の思想に規定されるのではなく、漢文をめぐって生み出される思考を緩やかに包括しうること。
- ハ ナシヨナリズムとは異なる次元において、日本人独自のアイデンティティを自覚的に表出しうること。
- ニ 儒学あるいは漢学という概念に比べて、中国文化の有する広がりにより精確に捉えることができること。
- ホ 和文脈との対立から発想されたものではあるが、単純な二項対立にはとどまらない普遍的価値をもつこと。

問十六 甲の文章中の傍線部2「思惟する主体を形成する」の説明として最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 漢詩文の読み書きを通して自らのありかたを定めようとする事。
- ロ 漢詩文の読み書きを通して美しく巧みな文章を我がものとする事。
- ハ 漢詩文の読み書きを通して論理的かつ抽象的な議論に熟達すること。
- ニ 漢詩文の読み書きを通して漢なるものと和なるものとを峻別すること。
- ホ 漢詩文の読み書きを通して自身に根ざす和なるものを再認識すること。

問十七 甲の文章中の傍線部3「宣長が嘆いたこと」に関連して、乙の文章の内容と合うものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 漢籍の影響は絶大だが、漢籍に馴染みがない人への影響は限定的なものだ。
ロ 漢籍の影響とは、何事につけ物事を大仰な理屈で論じようとする点にある。
ハ 善悪是非は万国で論じられるものであり、漢籍だけが論じるものではない。
ニ 日本の古典は漢籍の影響を受け、日本固有の部分を取り出すのは不可能だ。
ホ 漢籍の影響を意識していれば、その影響を取り除くのは比較的容易である。

問十八 乙の文章中の空欄 I に入る最も適切な語を次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ あやしき ロ かしこき ハ こちたき ニ さがなき ホ をさなき

問十九 乙の文章を収める本居宣長の著作を次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 折たく柴の記 ロ 湖月抄 ハ 玉勝間 ニ 日本外史 ホ 万葉代匠記 ヘ 蘭学事始

問二十 甲の文章中の傍線部4「干襄陽に与うる書」の原文である丙の文章について、以下の問いに答えよ。

(1) 丙の文章中の傍線部5「未始不相須也」の意味として最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ はじめから互いに相手を必要としているのです。
ロ はじめは互いに相手を必要とすることはないのです。
ハ はじめから互いに相手を必要としないのです。
ニ はじめは互いに相手を必要とするには及ばないのです。
ホ はじめは互いに相手を必要とするのが当然だと考えるものです。

(2) 丙の文章中の空欄 II に入る最も適切な語を次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 家 ロ 義 ハ 財 ニ 能 ホ 望

(3) 丙の文章中の傍線部6「不可謂上無其人。」の訓読として最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 上に其の人無しと謂ふべからず。
ロ 上に其の人と無く謂ふべからず。
ハ 上に其の人無くんば謂ふべからず。
ニ 上に謂ふべからずして其の人無し。
ホ 上に謂ふべからずんば其の人無きや。
ヘ 上に謂ひて其の人を無からしむべからず。

問二十一 甲の文章中の空欄 X に入る最も適当な語を次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 榮枯盛衰 ロ 毀譽褒貶 ハ 出処進退 ニ 大義名分 ホ 利害得失

〔以下余白〕